

世界女子バドミントン選手権大会 の懐古と反省

高 木 紀 子
天 野 博 江

① はじめに

今日、日本には数多くのスポーツが普及し世界でも指折りのスポーツ先進国であるが、その中でも女子が世界選手権を持っているのは、卓球とバドミントンとソフトボールだけである。とりわけ歴史の浅いバドミントンが世界制覇をするまでには「ローマは一日にして成らず」ごとく色々の困難があったことは言うまでもない。幸運にも第4回、第5回と連続メンバーとして参加した経験をもとにしてどのような経過を経て世界制覇がなされたかを綴ってみることにした。

② 世界女子バドミントン大会（ユーバー杯）とは

1936年より行なわれていた男子の世界選手権大会（トマス杯）に準じて1956年にかつての全英大会の女子シングルスに於て優勝したことの

ある名プレイヤーMrs. Uberが地球儀を型どった銀製のトロフィーを寄贈したことから始まった。第1回は1956年に行なわれ、以後3年毎に1回開かれて現在で5回を数えている。試合形式は、テニス



ユーバー杯

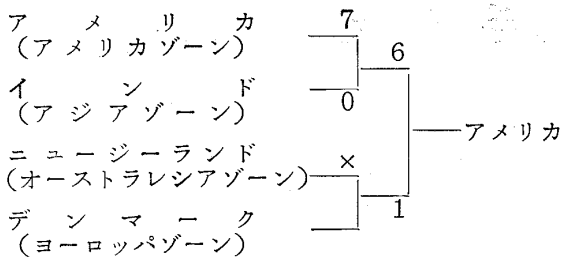
のデビスカップの様に世界を4つのゾーン（アジア、アメリカ、ヨーロッパ、オーストラレーシアに分けるがどこのゾーンに出場してもよい）に分けて予選を行ない、そのゾーン優勝国が1カ所に集まってインターゾーン決勝を行ない、その優勝国がチャンピオン国に挑戦するシステムである。なお団体戦の内容は計7試合を行ない（シングルス3試合、ダブルスは4試合（2つのペアがリーグ））4点先取である。これはあくまでも国同志の対戦なので個人戦はない。注（個人戦の世界選手権はないが、それに匹敵するものとして現在歴史のもっとも古い全英大会が暗黙の中に考えられている。）

③ 第1回～第3回大会の様子

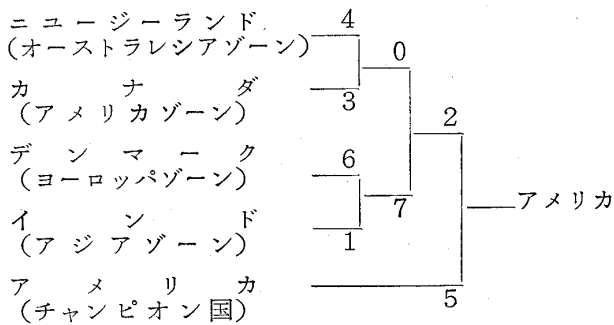
第1回～第3回までは日本の女子はレベルが低いということで参加していなかったのが、詳しい様子は解らないが、後記に示すとおりアメリカの全盛時代であったようだ。特にアメリカのジュディ姉妹（妹は全英大会において過去10年間シングルスに優勝）が3回にわたり活躍していたようである。それに当時は男子は圧倒的にアジアが強かったが、女子は欧米に比べはるかに技術的に劣っていたようで、アジアの強国インドネシアでさえチャレンジャーになることが出来なかった。

なおこれは余談であるが、私達は偶然の機会から第1回大会が行なわれたイギリスのブラックプールで試合をする光栄を得た。それは私達の体育館のイメージとは程遠いもので、さながらシャンデリアが輝く王宮の広間であった。こんなところにも、何かしらバドミントンが優雅なスポーツ、特にイギリスの貴族を中心にして発展したという裏付けを感じさせられた。

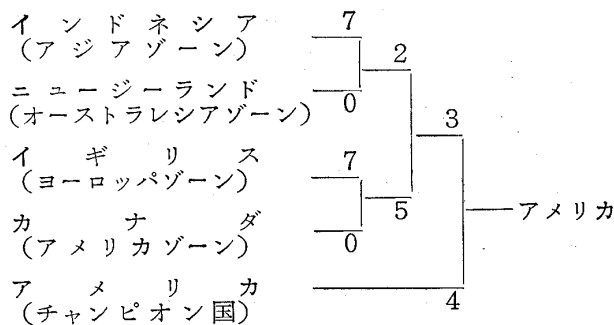
第1回 (1956~57) 於イギリス



第2回 (1959~60) 於アメリカ



第3回 (1962~63) 於アメリカ



④ 日本の初参加に至るまでの過程

日本が第4回の世界大会に参加することが決定したのは1964年であった。それまでは女子の国際試合としては第4回のアジア大会(ジャカルタ)だけであったが、内外の情勢を考えて女子も男子に続いて世界の檜舞台に参加させてもよいだろうとの見解に達したのである。その年の秋(1964年)10月に早速第1回の候補選手12名が全国から選ばれ神奈川県久里浜に集められた。当初協会の役員はじめ私達選手自身も、世界選手権といっても経験がないだけに何かしら縁遠い存在だった為、選手達はただ他人に負けたくないという気持の強いだけの合宿であった。丁度東京オリンピック大会が開かれていたので日紡の魔女ぶりをまざまざとテレビで見せ

つけられた思い出がある。

翌年3月に第2回合宿が開かれ、ある者は脱落し、又新メンバーも加わった。その頃協会の常務理事の小宮淳宏氏が監督に決定し、少しずつチーム編成が整っていった。4月に高木と横山選手が東南アジア遠征に出掛け、インドネシア、マレーシア、香港を廻って来たことは選手達に大きな刺激を与え、国際試合をより身近かに考えさせるようになった。その後逗子、小田原などで合宿を重ね福井コーチも誕生した。なおその頃すでに過去の実績などによって選手は次のように内定していた。

(高木、横山、横井、天野、高橋、後藤、高塚)

その間、監督は選手が全国からの寄せ集めであるので、ともするとバラバラになりやすいチームを統一させていくこと、しかしバドミントンはあくまでも他のスポーツ、バレーボールやバスケットボールのようなチームゲームとは違う個人競技なので、1人1人の個性はあくまでも尊重することに日夜努力を傾けてくれたし、監督自身も権力で選手を率いていくのではなく人間性に魅かれて選手が監督を慕っていくという最善の方法をとってくれた結果、私達には二度と経験できないであろうと思われる素晴らしいチームが出来上がった。

なおチームとしての大きな問題点は次のようなことであった。

① 国際試合の経験が少ない者をどうやってあがらないで試合できるようにさせるか(特にそれまでに日本の女子が相手とした外国選手は全てアジア人であったので見知らぬ欧米人に対する恐れがあった。)

② 技術的には特に試合数の多いダブルス強化に重点をおくことと長身の外人に対する戦法を身につけさせること。

③ 外国はほとんど夜試合が行なわれるのでそれに合わせてコンディションの調整をすること。(食生活もパン中心)

以上3点に対し監督は常に訓示をした。"初参加だから外人に教わるなどという考えはだめだ、どんな相手でもたたきのめそう、という気持でやるのだ"ということであった。

そして欧米選手を知っている男子選手に色々聞きただしたり、上背のある男子選手に、試合相手になってもらうなどして出来る限りの対策をした。又これは特に問題点ではないが画期的なこととして、従来の服装のショートパンツから、より動きやすいと思われるスコートに変えるべく努力がなされた。これはともすると服装などの点で外国選手にコンプレックスを抱いては損だからという精神的な意義も考えたからだ。

そうこうしているうちに、いよいよ目標が近づいた。なお途中で思いがけぬ高塚選手のアキレス腱切断というチームに手痛いショックをもたらしたが、残されたメンバーで「たたきのめそう」という合言葉でより強く団結して来るべき日を迎える万全の準備をした。

⑤ 第4回大会

翌1966年2月、とうとうアジアゾーン予選会がインドのハイデラバッドで行なわれることになった。タイ対インドの勝者と対戦するので技術的には、はるかに日本が有利とされていたが日本の真冬から真夏の暑さの中に飛び込んで行ったため思いがけぬアクシデントが起り関係者をあわてさせた。それは6人中の2人が風土病にかかり、40°C近い熱のためほとんど食事もと



開会式にて初めて
ユーバー杯にさわる私達

れず、まいてしまったのだ。しかし幸い試合前日に起き上がることができたので恐る恐る試合に臨んだところ結果は心配をよそに7-0に終わった。これによってアジアの代表として

ニュージーランド大会に出場する権利を得たのである。なおここで私達は大きな教訓を一つ得た。それは海外遠征の場合は常にアクシデントも計算に入れてなお勝つ自信がなければいけないということである。

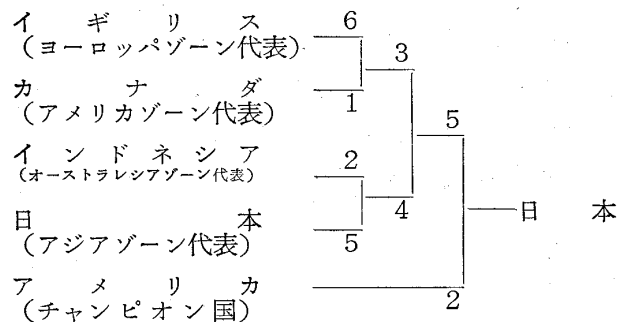
1966年5月、いよいよ本番である。

選手団は次のとおりであった。

監督(小宮淳宏) コーチ(福井正康) 選手(高木紀子, 横山満子, 横井文子, 天野博江, 高橋とも子, 後藤和子)

羽田を出発する時は監督、コーチはじめ選手の誰ひとりとして経験がないだけにまさか優勝するとは思わなかったであろう。正直いって選手の私達自身も対インドネシア戦だけはどうしても勝たなければいけないという気持であったように思う。なお組合せは次のようであった。

第4回大会(1965~66) 於ニュージーランド



対インドネシア戦(5月14日) 於ナピア

ニュージーランドは丁度晩秋であった。経費節約の為ホテル住いをやめモーテルで自炊して大会に臨んだ。開会式にユーバー杯が飾られたが選手自身にはその杯が何かはるか縁遠い存在

の物であるような印象をうけ自分達が日本に持ち帰ることができるなどと夢にも思わなかった。試合はインドネシアの執念とも言うべき必死な戦いに

日	本	5-2	インドネシア
高木	木	2-0	ミナルニ
横山	山	2-0	ユリー
横井	井	2-1	レトノ
高後	木藤	0-2	{ミナルニ レトノ}
天高	野橋	2-0	{コリー イダワチ}
高後	木藤	2-0	{コリー イダワチ}
天高	野橋	0-2	{ミナルニ レトノ}

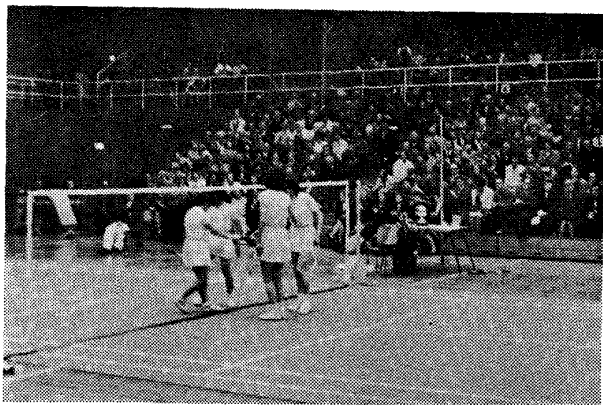
もかかわらず、日本は、シングルス3勝、ダブルス2勝で5対2というスコアで勝ち進んだ。その夜は試合のはじまったのが午後8時頃で終了したのが夜中の1時半頃だったのには本当に驚かされた。(夜間行なう理由はいろいろとあるだろうが主に観客のためを思っていることであろう。)その上初めてホーバーコート(従来の床にコートをかくのではなく床にプラスチックのコートを敷くというやり方)を使用したのでそのマットの感触に慣れる迄に一寸手間どったように記憶する。だがこのマットは非常に便利なので、その後の国際試合にはほとんど用いられるようになった。

インターゾーン決勝(5月18日)

於オークランド

会場がナピアからオークランドに移った。対戦相手はカナダを6-1で破ったイギリスチームである。当時のイギリスチームは選手が揃っていてチャンピオン国のアメリカよりも強いだろうとうわさされていたのである。

初めて対戦する相手に対しては基本を忠実に行なう以外はない。それに上背の違いに驚ろかされていたのでは始まらないと自分達に云い聞かせながら対戦したところ、シングルスは簡単に3人共勝ってしまった。この分ならダブルスも、と多少の自信と安心感を抱いたところさあ大変。ダブルスが全然勝てないのだ。178cmぐらいの選手が2人コートに入ってしまうと壁の様な感じで我々を威圧してくるのだ。必死に打ち込んででもはね返ってくるのでしまいにはどこに打てばよいのか解らなくなってしまうのだ。



上背のあるイギリス選手(向って右側)

控室で監督はじめ選手達は何とか1勝をしなければむざむざとチャレンジになるチャンスを失なうのだと思うと、いても立ってもいられない気持ち

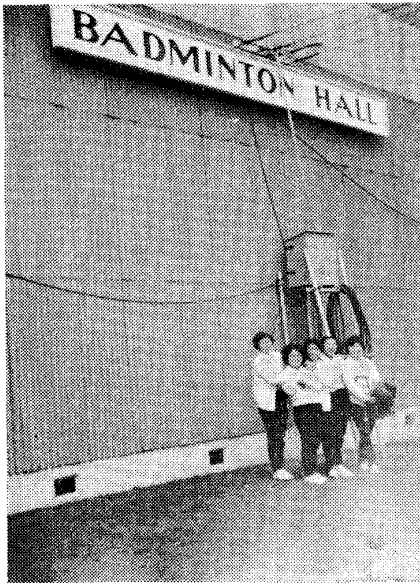
日	本	4	-	3	イギリス
高	木	2	-	0	ベアストウ
横	山	2	-	0	ホートン
横	井	2	-	0	スミス
高	木	0	-	2	{バランドン ホートン}
天	野	0	-	2	{ベアストウ ロジャース}
高	木	1	-	1	{ベアストウ ロジャース}
天	野	0	-	2	{バランドン ホートン}

になってきた。そんな気持ちを神様が可愛想に思ってくれたのだろうか。ようやく1勝できチャレンジラウンド進出が決まった。なおここで特筆すべきことは、バドミントンの試合に於ては選手個人の力を充分発揮させるために外部からの助言、いわゆる、サイドコーチは一切禁止されている。しかし、日本に於ては団体戦の場合などはベンチをコートサイドに置く習慣になっているが、ここでは席が設けられていなかった。そのため試合中どんなに追い込まれて思案にくれても、監督などの助言を受けることが出来ず、選手達が自分自身で解決方法をみつけなければいけなかったので慣れない日本選手にとっては相当こたえたのである。観衆は驚ろいた。子供のような小さな体でコートを走り廻り、しかも初参加というハンディキャップを克服してイギリスチームに勝ったのだから。現地の翌日の新聞は私達選手が恥かしくなる程の賞賛ぶりであった。

チャレンジラウンド(5月21日)

於ウエリントン

アメリカの連勝なるか否か?という興味深い試合であったが、ほとんどの人々はアメリカの力を信じていたことは間違いない。日本人などに負けてたまるかというアメリカ選手に対して負けてもともとという日本選手であった。シングルのトップはバドミントンの女王として君臨してきたジュディ・ハッシュマン、どの新聞も高木選手が勝つとは予想もしていなかった。



思い出のホール

それがかえって大和なでしこを奮奮させ勝利の女神を日本に微笑させてしまったのだ。閉会式で、ずっしりと重いユーバー杯を渡された時は、信じられないような気持ちであった。ついに1966年5月において世界のバドミントンの歴史は変わったのだ。男子に引き続き女子もアジアが世界を制覇するようになったのである。これまでに至るまでの過程には数々の苦労があった。

それがかえって大和なでしこを奮奮させ勝利の女神を日本に微笑させてしまったのだ。閉会式で、ずっしりと重いユーバー杯を渡された時は、信じられないような気持ち

しかし、ここでいちいち数えあげていてもきりがないので割愛するが、選手を育ててくれた関係者達の努力が結ばれたというべきであろう。

日	本	5	—	2	アメリカ
高	木	2	—	0	ジュディ
横	山	2	—	0	バリナガ
横	井	2	—	0	ジュンセン
高	木	0	—	2	{ジュディ レモン
後	藤				
天	野	2	—	1	{バリナガ ジュンセン
高	橋				
高	木	2	—	1	{バリナガ ジュンセン
後	藤				
天	野	0	—	2	{ジュディ レモン
高	橋				

⑥ 第5回目指しての強化

日本がユーバー杯を獲得した時点ですでに第5回大会への強化が始ったとしても過言ではなからう。第4回大会がラッキーであったと見る人々に対しても第5回では自国で堂々と防衛しなければならないと思うと喜びだけにのんびりと浸っていることは許されなかった。監督や選手達は帰国の途上でさえ3年後の大会につい



第4回世界選手権大会メンバー

高橋・横井・福井コーチ・天野・後藤
高木・小宮監督・横山

てしばしば話し合った。第4回の経験者が同じように出場することが理想だろうが、女性の年齢の社会的制約から無理だと思われる。それにはどの様に対処すればよいのだろうか？ あれこれと想像しても、先のことは皆目見当がつかねる。神のみが知る限りであろう。結論としては次の様に考える以外なかった。

日本でバドミントンをやっている全てのメンバーが、自分達が出て戦ってユーバー杯を防衛するのだという気持で努力し、3年後の大会時点で最も強い選手が出ればよいのだ、ということであった。その後1966年12月、第5回アジア大会がタイのバンコックで開かれた。チャンピオン国としての貫録を示さなければという気持が強いだけに選手4人（高木紀子、天野博江、高橋とも子、後藤和子）は今迄にない精神的な苦しさの中で試合に臨んだ結果、団体、単（高木）優勝、複2位3位を取ることが出来、どうやら面目を保つことができた。翌1967年3月、高木、天野選手が日本女子で初めて全英大会に参加した。チャンピオン国の強さを世界中に披露する為に、伝統あるヨーロッパに乗り込んだわけだが成績は芳しくなく単（高木）2位、複ベスト8であった。これによって日本もまだまだ油断ができないと関係者達は痛感させられた。その後今迄になくひんぱんに海外遠征が続き、各地で日本の女子の強さを発揮した。

1967年12月、いよいよ第5回ユーバー杯の準備が具体的になり、12名の候補選手により、強化合宿が代々木オリンピック青少年スポーツセンターで開かれた。全体的に年齢も若返り、一部の者を除いては2年後という気安さからのんびりとしたムードであった。

1968年5月、正式に監督今井先氏、コーチ毛利清志氏、マネージャーに山本洋彦氏が決定し防衛戦対策も軌道に乗り始めた。

その後、山形や東京で合宿を重ねたが、その間コンディションの調整に失敗した者達が1人抜け2人抜けしていった。1968年12月、最終的に候補選手9名が決定し長崎合宿を迎えた。

日本中の多くの人々が、おぞうにを食べて骨休みをしている時に選手達は温度が5°Cより上らない寒い体育館内をかけずり廻った。

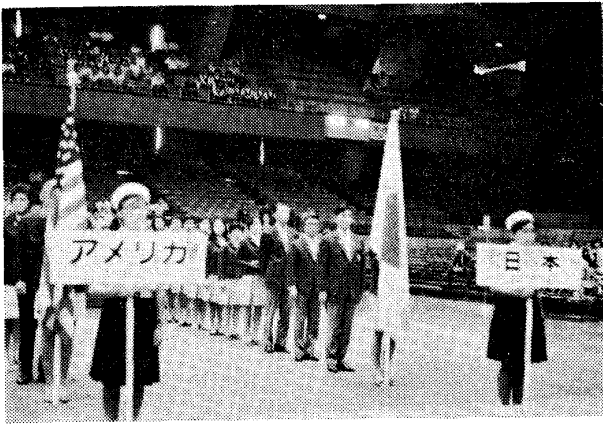
除夜の鐘を聞きながら監督、コーチ、主将は額を集めて来る6月に対しての対策を練った。

9名の中の誰れが出て勝たなければいけない。特に第4回がダブルスに於て苦戦したのでどうしてもダブルスを強化しなければいけない。なお、2カ月に1回位の強化合宿ではなかなか技術の向上を望めないで選手達の地方に於ての毎日の練習に重点を置き、それぞれの欠点を直すべき課題をもたせ、より充実させようと試みた。又土・日曜日を利用し互いに選手が上京し個々の強化練習に励んだ。

1969年3月、日本は全英選手権大会に4人の女子選手（高木、天野、高橋、湯木）を送り込んだ。その頃すでにゾーンの優勝国が決まり（アメリカゾーン＝アメリカ、ヨーロッパゾーン＝イギリス、アジアゾーン＝タイ、オーストラレシアゾーン＝インドネシア）特に本命と思われるイギリスの力を見てくるためであったが、結果はシングルス1位（湯木）、2位（高木）、ダブルス2位（高橋、天野）、3位（湯木、高木）を取り関係者は大いに希望を抱くことになった。

1969年5月、さわやかな緑が目にしみる頃、1カ月後に決戦を控えての最終合宿、実戦さながらの試合練習やマスコミからの刺激に多少の不安を抱かせられながらのミーティング、話題の中心はいかにして試合当日に最高のコンディションに持っていくべきか？ということであった。身体的なものに関しては、地元であることと、それぞれ長い選手生活を経てきた者達だけにそれ程心配はないがそれよりもむしろ追われる立場という精神的な圧迫感をどう克服するかという点であったが、それには試合に臨んでは当然のことながら一球一球に全力をそそいで戦う以外はないというふうに自分自身を納得させることであった。

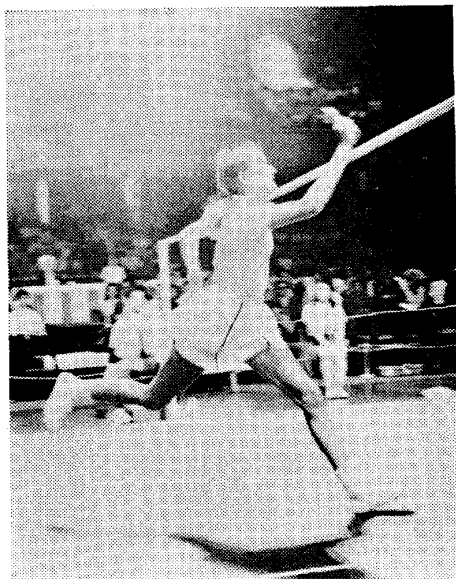
⑦ 第5回ユーバー杯大会 於 東京



開 会 式

1969年6月8日。いよいよ開会式。それぞれのお国柄を表わしたブレザーで勢揃い、評判どおりイギリス、インドネシアが強そうだった。試合の組み合わせは次のとおりであった。

イギリス (ヨーロッパゾーン代表)	7			
タイ (アジアゾーン代表)	0	3		
米国 (アメリカゾーン代表)	0		1	
インドネシア (オーストラリアゾーン代表)	7	4		日本
日本				6



イギリス シングルス No. 1 ペリン選手

高木主将より国際バドミントン協会会長にユーバー杯が返還されたときは再び日本に戻ってくるだろうか？という不安を関係

者達はみんな抱いたことであろう。

なおレセプションで顔を合わせたところ前回(4回)大会の出場経験メンバーはアメリカ2人、イ

ンドネシア2人、日本が4人で圧倒的だったのを見ると、外国も女子に於ては新陳代謝が激しいようである。

関係者達は再会を喜び合いながらも月日のたつ早さに今更ながら驚ろいた。

第1日のイギリス対タイ戦は、イギリスの7-0という圧倒的な勝利であった。第2日、インドネシア対アメリカ戦は、アメリカの健闘を期待した試合であったが、ジュディ・ハッシュマンの抜けた穴は大きかったようで、インドネシアの7-0に終わってしまった。

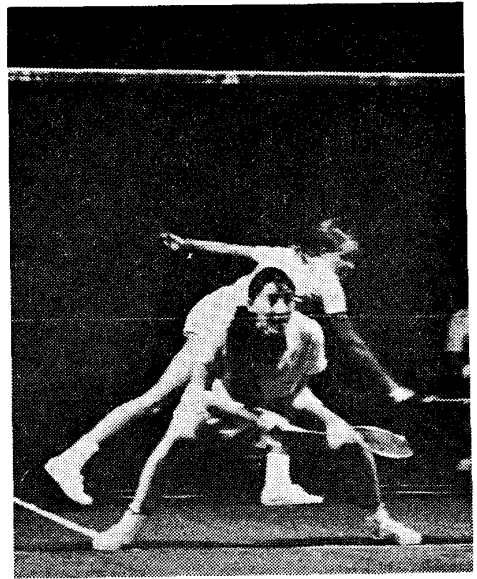
インターゾーン決勝

(インドネシア対イギリス戦)

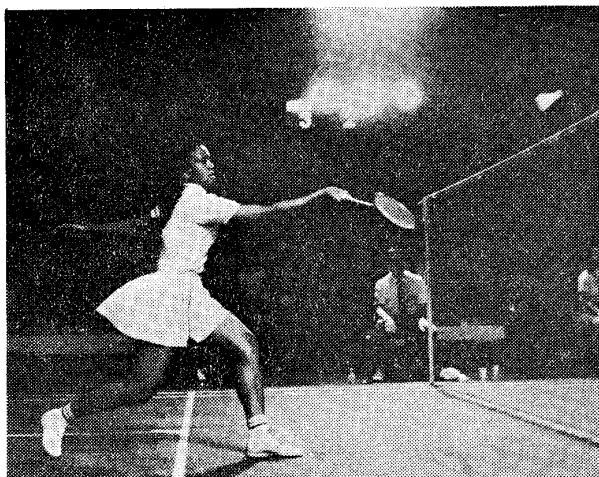
チャレンジラウンド進出をかけて双方とも非常な意気込みでぶつかり合った。日本チームとしては、どちらが進出してきても勝たなければならないから、一部始終を見守っていたところ、とうとうインドネシアの4-3という粘り勝ちに終わった。

チャレンジラウンド(日本対インドネシア)

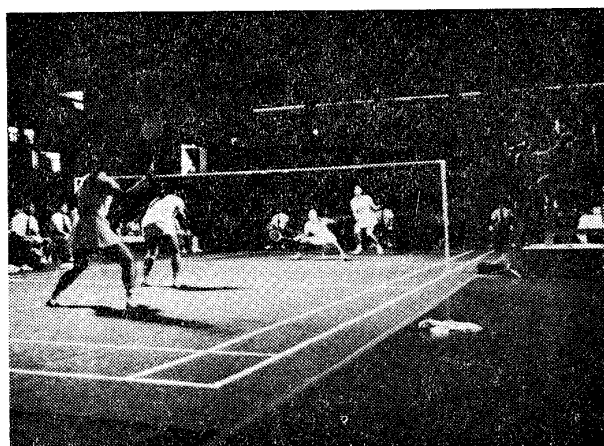
インドネシアは本当にひどいことをした。何故ならば、国際バドミントン競技規定としてシングルスはランキング順に出さなければならないとうたってあるにもかかわらず(どの時点でのランキングか規定してないが)それを無視したのであった。対イギリス戦で示すように、ミ



イギリスのダブルスチーム
(ペリン・リカード組)



インドネシア シングルス No. 1 ミナルニ選手



インドネシア ダブルス No. 1
ミナルニ・レトノ組対高木・湯木組
(手前インドネシア)

ナルニが No.1 であることは火をみるよりもあきらかなのに、それを No. 2 として出しているのだった。国としての信用を失なうことが解っていながらあえてそうした理由は、国技として国をあげての試合であるためどうしても勝たなかったのであろう。そして練習は全て日本の関係者をシャットアウトした秘密練習であった。

試合前日、選手達は最後の調整を行なったがこの時程私達にとって一球一球が大事であることを痛感させられたことはなかったであろう。生活時間も試合時間（午後4時）に合わせて、コンディションを整えた。

6月14日、前日からの強い雨も私達を祝福するかの様に晴れ上がり、1万余人の見守る中で試合が開始された。試合に先立って関係者が一番心配したことは、過去の国際試合でのインド

ネシアの観衆のマナーの悪さであった。何故なら過去2回の男子世界選手権大会であまりの悪さに没収試合になったことがあるからだ。そのため、今回は事前に大使館を通じて警告をしておき、もし騒いだ場合は没収するとの処置をとっていた。

第1試合

湯木—ミナルニ戦の予想は5分5分であった。実力でははるかに湯木選手に分があるが、キャリアの差ということになるとミナルニが上であった。しかし、第1試合という重みやミナルニの計算しつくされたプレイに湯木選手は実力の半分も出ないうちにあっけなく負けてしまった。一瞬日本側のベンチは動揺した。しかし引き続き高木、高橋選手が実力を発揮してシングルスで2—1とリードし、ダブルスに入った。トップダブルス同志の対戦、この試合がこのチャレンジラウンドの勝敗を決すると思われるので双方とも非常に熱の入ったものだった。

第1ゲームは
インドネシア

が取ったが、高木湯木組は絶対に勝てるのだと互いに励まし合いともすると観衆の期待が重くのしかかってくるのを払い

日 本		6—1		インドネシア	
S ₁	高 木	2—0	ポ	ピ	ー
S ₂	湯 木	0—2	ミ	ナルニ	
S ₃	高 橋	2—0	クルニ	アワン	
D ₁	高 木	} 2—1	{	ミナルニ	レトノ
	湯 木				
D ₂	天 野	} 2—0	{	ヌルハエナ	ヘステイ
	高 橋				
D ₃	天 野	} 2—0	{	ミナルニ	レトノ
	高 橋				
D ₄	高 木	} 2—0	{	ヌルハエナ	ヘステイ
	湯 木				



閉会式にてトロフィを受ける高木主将

淡々と試合を進めた結果、第2ゲームをものに
し、第3ゲームに持ち込んだ。息づまるような
ラリーの応酬の結果、ついに日本が勝った。こ
れで3-1。日本はこれに気をよくし、引き続
いてのダブルス(天野・高橋)組も全く相手を寄
せつけずに勝ち日本の防衛が決定した。選手達
は喜びを感じるといふより今迄の肩の荷から
解放されたため、しばらくはぼうっとしている
ような有様であった。人々からお目出度う!と
祝福の言葉をあびせられても、何だか夢のよ
うな気持で再びユーパー杯を手にした時でさえ、
信じられないような心情であった。

なお現在、今回の勝因は何であったかと静か
にふり返ってみて考えられることは、計画的に
練習された成果であろうし又全国のバドミント
ン愛好者達の熱心な支援の結果であろうと思わ
れる。

⑧ 今後の日本の進むべき方向

ユーパーカップが世界バドミントン連盟会長
から日本に渡された時、すでに次回の防衛に対
する戦いが始まったのである。それには特に若
手選手の養成が急務であることは言うまでもな
い。その後1970年3月、女子選手5人が全英選
手権大会に出場したところ、次代を背負うはず
の湯木選手が不幸にもアキレス腱を切ってしま
い日本の大きな損失であった。しかしそのかわ
りとも言うべき竹中選手が堂々と優勝し、何と
か希望をつないだのである。

現在のところ開催地は決定していないが、そ
ろそろ候補選手を集めての合宿を始めなければ
いけないであろう。過去2回にわたり、チャン
ピオン国になったのは努力の結晶であったこと
は間違いないので、関係者達の日夜の努力がな
されなければ、そう簡単には世界選手権は取れ



第5回世界女子バドミントン選手権大会選手団
高橋・本間・高木・天野・湯木・竹中・浦口・相沢・後藤
今井・毛利・山本

ないと痛感する次第である。が何としてもユー
バー杯を他国に渡したくないものである。

なお結論として次のような点すなわち生理的
心理的技術が問題になってくるであろう。

始めに生理面について述べると、

第1に、試合は従来日本では昼間行なわれる
という習慣であるが、国際試合はほとんど夜に
行なわれるので、夜間に最高のコンディション
を出すことが出来るように日頃から訓練しなけ
ればいけない。その代わり朝はどんなに周囲が
やかましくても必要な睡眠時間だけはとれるよ
うにしなければいけない。

第2に、特に海外へ行った場合、食生活が一
番問題になるが、私達としては現地の食物を嫌
わずに食べることが先決であると思う。何故な
らば現地の食物はその土地の気候、風土にあっ
たものが自然に生まれてきているのであるから
それが一番ふさわしいのである。例えば暑い国
へ行った場合、日本の様な淡白な食事では到底
身体がもたないのは多くの人が知るところで
あろう。又その反面、ヨーロッパなどでは新鮮
な生野菜の料理が少ないので自分達でマーケッ
トより野菜を買い込んで食卓を飾るぐらいの工
夫も必要であろう。

第3に、海外に遠征し現地に到着してから本
番の試合までどれぐらいの期間が一番適当だろ
うかということである。これは試合内容や選手
によっても多少の差はあるであろうが、大体3
日から1週間ぐらいのところに本番がくるよう
にするのが一番適当と思われる。何故ならば、
身体がその土地にあうようになる迄に3日ぐら
いかかるであろうし、又反対に余り長いと、単
調な生活が続きやすいので、かえって志気喪失
を招くことになりやすいと思われる。

次に精神面について述べると、

第1に、会場がどんなにやりにくくても、又
観衆にどんなにやじをとばされたり、ひどい時
には相手国に有利な審判の判定がなされても、

笑って対抗できる精神的ゆとりを持たなければ
いけない。それには、従来の日本選手に多くみ
られる過保護的な選手では絶対に駄目で、コート
に入ったならば最後まで自分1人で戦かうの
だという考えを普段から習慣づけておく必要が
ある。

第2に、少なくとも国際試合に出る選手は、
英会話を徹底的にマスターする必要がある。審
判上のトラブルなどで話しが出来なくて不利に
なることがしばしば見受けられるし、又スポー
ツを通しての国際親善を思うと話しが出来ない
のではどうにもならないからである。

最後に技術面をみると、

第1に、身長差がより大きくあらわれるダ
ブルスの研究が、まだまだ遅れていると思われ
る。日本に於てシングルスの世界一は育って
も、ダブルスの世界一が中々育たないことから
も解るとおり……対策としては、規則上、どう
しても防御体勢よりはじまるサービス（腰の線
より下で打たなければいけない）をいかにして
相手の攻撃をやわらげるかという研究と前衛の
リーチ範囲を今迄の倍以上に広げる様な練習を
しなければならぬと思われる。

第2に、身長差は現実にはどうしようもな
いのであるから、外人が一步で届くところなら
ば、日本人は2歩走らなければならない。だか
ら、それに必要な体力、特に持久力を養うこ
とが必要である。

第3に、比較的日本人に得意な敏捷性（反応
時間を短かくする）を更にのばす様なトレー
ニングを積み、また逆に、外人の反応を遅くさせ
る様な手段としてのフェイントモーションを更
に工夫して身につけさせる必要がある。

第4に、体力をカバーする為には、バックハ
ンドを徹底的にマスターしなければならない。
フォアハンドに劣らぬスピードは勿論である
が、まず第一に絶対的な正確さを要求したい。